

修士論文(要旨)

2013年1月

聴覚障害者のデフ・アイデンティティの発達に影響する要因の検討

指導 種市 康太郎 准教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
211J4003
稲垣智子

目次

I. 問題と目的	—p. 1.
II. 方法	—p. 1.
III. 結果と考察	—p. 1.

引用文献

I. 問題と目的

聴覚障害は、音声情報取得やコミュニケーションの制限や外見で判断できないという特徴がある。満足に意思疎通が図れない孤独感、自尊心の低下が指摘されるが、聴覚障害者は手話を用いてろう社会に属し、ろう者のアイデンティティを持つ。聴者社会で生きる上で、ろう者のアイデンティティが大きな意味を持つてくるといわれる。

これは聴覚障害者特有の、デフ・アイデンティティとされ、聴者集団と聴覚障害者集団の2集団に対する所属意識である(Weinberg & Sterritt, 1986; 藤巴, 2003)。肯定的な所属意識を持った状態がデフ・アイデンティティの確立した段階とされる(甲斐・鳥越, 2006)。Glickman & Carey(1993)は発達過程を、聞こえることを正常とし価値を置く聴者段階(第1段階)、聴覚障害者集団と聴者集団との価値観の間で揺れ動き、混乱が起きる境界段階(第2段階)、手話やデフ・コミュニティにのみ没頭していく没頭段階(第3段階)、聴覚障害者と聴者の文化の双方の文化的違いを受け入れる二文化段階(第4段階)、第4段階に至ればデフ・アイデンティティは確立し安定する。その過程に、家庭や教育環境、障害の程度、デフ・コミュニティとの関わりが影響し、デフ・アイデンティティが確立されれば、孤独感、自尊心の低下等が軽減し、人間関係やデフ・コミュニティとの関わり、ろう文化(ろう社会への価値観)等を聴覚障害者自身が肯定的に捉えられるようになるといえる。

したがって、次の仮説の2点を検討する。①家庭環境や教育環境、障害の程度など、聴覚障害者の持つ属性によってデフ・アイデンティティの形成は異なる。②デフ・アイデンティティが二文化段階(第4段階)に至れば、聴覚障害者の孤独感は低くなり、自尊感情は高くなるなどの肯定的な心理的状态が生じやすい。

II. 方法

関東と関西の聴覚障害者協会会員、手話サークル所属および団体から紹介を受けた聴覚障害の男女93名を対象に質問紙を行った。

質問紙は、①Glickman & Carey(1993)のデフ・アイデンティティ尺度(DIDS)の鳥越訳(1999)による日本語版、②山本・松井・山成(1982)の自尊感情尺度、③工藤・西川(1983)の改訂版 UCLA 孤独感尺度、④フェイスシートで構成した。

III. 結果と考察

対象者は20代から40代、2級以上の者、かつ、日本語に馴染みがある者、家族に聴覚障害を持つ者がいる割合が高かった。フェイスシートから得られた基本情報とデフ・アイデンティティの発達段階との検討では、年代のみに有意差が認められ、40代以下は境界段階(第2段階)、40代以上は没頭段階(第3段階)が有意に多いことが明らかとなった。また、デフ・アイデンティティの発達段階と自尊感情得点の比較では、二文化段階(第4段階)が他の3つの段階に比べて最も自尊感情得点が高く、孤独感得点の比較では、境界段階(第2段階)が他の3つの段階と比べ最も孤独感得点が高かった。

対象者は、聴覚障害者を持つ家族が多いという家族構成上の特徴、日本語に馴染みがあるという特徴を持ち、それが結果にも反映していると思われる。今回の調査からデフ・アイデンティティの発達段階と自尊感情、孤独感の全体的な傾向を掴むことができた。聴覚障害者の価値観(ろう者の世界)と聴者の価値観(聴者の世界)が、デフ・アイデンティティの形成に与える影響には、プラスとマイナスの側面があるが、聴覚障害者が、それをどのように捉えているかが重要といえるだろう。

引用文献

- 藤巴正和(2003). 青年期の聴覚障害者におけるアイデンティティの問題と支援のあり方について 総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集, **19**, 51-58.
- Glickman, N. S. & John C. C. (1993). Measuring Deaf Cultural Identities: A Preliminary Investigation. *Rehabilitation Psychology*, **4**, 275-283.
- 甲斐更紗・鳥越隆士 (2006). ろう学校高等部生徒のアイデンティティに関する研究 特殊教育学研究, **44**, 209-217.
- 工藤力・西川正之 (1983). 孤独感に関する研究(1)—孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討— 実験社会心理学研究, **22**, 99-108.
- 鳥越隆士 (1999). ろうと文化 中野善達・吉野公喜 (編) 聴覚障害の心理 田研出版 pp. 157-171.
- Weinberg, N. & Sterritt, M. (1986). Disability and Identity: A Study of Identity Patterns in Adolescents with Hearing Impairments. *Rehabilitation Psychology*, **31**, 95-102.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子(1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 **30**, 64-68.